

土手之元のキリシタン墓碑

この墓碑群の 4 基はどれもデイスaitでつくられています。3 基は上部の中央線の両側が斜面になっている切妻型で、最も保存状態の良いもう 1 基は横置き半円柱型で、全長は 121.5cm です。正面には花十字が浮き彫りされており、下部左には慶長九年（1604 年）と刻まれています。洗礼名と亡くなった月が刻まれている痕跡がありますが、読み取ることはできません。上面には十字架を支えていたと思われる穴があります。付近で複数の墓碑が見つかったため、この地域には島原の乱（1637-1638）より前、キリシタン墓地があったのかもしれない。

日本のキリシタン墓碑について

日本におけるキリスト教の初期につくられたキリシタン墓碑として確認されている 192 基のうち、146 基が長崎県にあり、その全てが 17 世紀初期のもので、（1581 年につくられた日本で最も古いキリシタン墓碑は、大阪市に近い四條畷市にあります。）長崎地域のキリシタン墓碑は、当時のヨーロッパの墓のデザインを反映し、平板型・切妻型・半円柱型・角柱型のいずれかに整形した石を平置きにしたものがほとんどです。仏教の墓石には漢字数文字からなる故人の死後の名前（戒名）が刻まれるのに対し、キリスト教の墓石には、多くの場合、西洋式の洗礼名が記されます。花十字や横棒が二本の形十字、イエス・キリストの名前の略語である「HIS」という 3 文字で飾られていることもあります。石の墓標は高級品だったため、墓碑で弔われているのは金銭と権力に恵まれた人々だったと考えて良いでしょう。キリスト教が禁止された後、このような平置き墓石の中には、くり抜かれて手を洗うための手水鉢にされたり、石垣に組み込まれたり、地中に埋められたりして、仏教の建造物の一部に転用されたものもありました。長崎のキリシタン墓碑は、ほとんどが当初置かれた場所には残っていないものの、もとの設置場所の付近で発見されることがよくあります。